住まい備忘録 第24回

奥深きかな建築 故に楽し建築

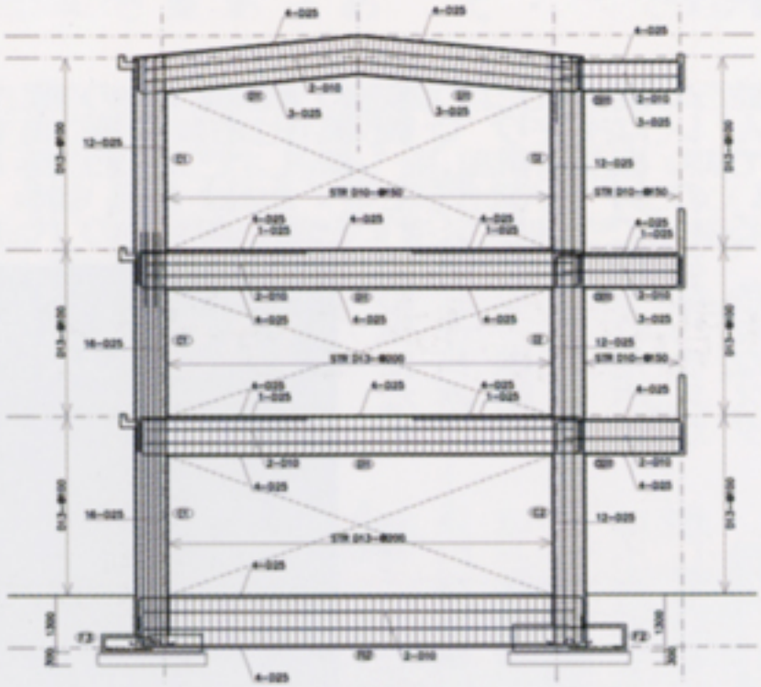
㈳日本建築家協会 沖縄支部幹事
前田 慎 ポイントウォーカーデザイン

専門性ある多角的な視点

某保育園階段室

私は意匠屋ですがここ1年半、どっぷり構造設計に浸っています。意匠屋として住宅設計に携わる事と、構造屋として携わる事にどんな違いがあるのだろうか？おそらく、そんな視点で興味を持ち、そこを聞いてみたいのではないでしょうか。先に結論を書くと、意匠屋が構造知識を有する事は非常に重要ですが、実際やってみると・・・まだわかりません。ただ、建物を見る目を複数持ったと思います。意匠眼、構造眼（このところ設備にも携わっているので設備眼も）。

数週間前、某住宅新聞の住宅紹介を見ていました。意匠計画的には目を留める程の物ではないその住宅、ふと「ん？この開口部の無目、RCだな・・・庇も付いている・・・」にしては写真で見るとスパンの割に成があまり無いな・・・」「ん？このスラブ広いな・・・下階の鉛直支持材は一部ズレている・・・」「構造的に割とすごい事（良い意味で）やっているかもしれないな、この住宅・・・実物と構造図、見てみたい」。建物をスキャンするような視点かもしれません。強いて言うと、意匠眼＝問診、触診等。構造眼・設備眼＝レントゲン、MRI等。最近は、今まで以上に多角的な見方で建築を堪能しています。



配筋図

小説家は話しのクライマックスに向け、気づくかどうかの仕掛けを文章に紡ぎます。伏線を張る。その事で、作品の緊張や読む者の精神の高揚は極点に達し、感動を与えます。建築家は建物の中に見せどころを必ず設計します。そして、見せどころの為に伏線を張っていると思います。それは、住む人の生活のふとした所作の為であったり、住宅の性能向上の為であったり、住む人のメンタリティーの為であったり。意匠や構造や設備が伏線のツールとして、空間の中でほのめかされています。

「おっ！そこに気づいてくれたんだ、うれしいねー」